

中学生・高校生の英語学習実態に関するインタビュー分析
——質的分析手法の TAE を用いて——

Interviews on the English Study of Japanese Junior and Senior
High School Students: A TAE Qualitative Analysis

酒井英樹・工藤洋路・高木亜希子・加藤由美子・福本優美子

Hideki SAKAI, Yoji KUDO, Akiko TAKAGI,

Yumiko KATO, & Yumiko FUKUMOTO

信州大学・駒沢女子大学・青山学院大学・

ベネッセ教育総合研究所・ベネッセ教育総合研究所

Shinshu University, Komazawa Women's University, Aoyama Gakuin University,

Benesse Educational Research and Development Institute,

& Benesse Educational Research and Development Institute

Abstract

This article analyzes interviews with two junior high school students and two senior high school students as regards their English study. The analysis was carried out using the Thinking at the Edge (TAE) steps. The major findings were that both junior high school students used self-decision-making about their ways of studying English; on the other hand, the two were different in terms of the value they place on communication: One values both conscious English study and communication whereas the other values only the former. As to the senior high school students, it was found that teachers and past experience with English can be influential factors for their English study. It was suggested that students should be given sufficient information about how to learn a language and about the effectiveness of the learning method to facilitate students' better decision-making.

Keywords

The English Study of Junior and Senior High School Students, Interviews,
A Qualitative Study

1. 研究の背景と目的

本稿は、ARCLE 研究会(ベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会)の英語学習実態把握研究分科会が2013年度に実施したインタビュー調査結果の一部を報告するものである。ベネッセ教育総合研究所では、2008年度に生徒2,967名、教員3,643名を対象に『中学校英語に関する基本調査』を実施した。本研究では、この量的調査を踏まえ、量的調査では捉えきれなかった英語学習の実態について、質的調査によって明らかにす

ることを目的としている。すなわち、中高生が授業の予習・復習、宿題、個人的学習など、主に学校外での学習をどのように行っているか、インタビューを行い、英語の学習やその実態を明らかにすることである。本稿では、16名を対象としたインタビューの第1次分析を踏まえ(第1次分析の結果については、本紀要の酒井・工藤・高木・加藤・福本・津久井、2015を参照されたい)、参加者の中から4名に焦点を当て、一人ひとりから得られる個別の文脈に即し、それぞれの学習者の行動や意識について詳細に分析した第2次分析の結果を報告する。

2. 研究方法

2.1 参加者

本調査の参加者は、中学校2年生8名、高校2年生8名の計16名であった。この16名から、第2次分析のために中学2年生男子(中学生A)、中学2年生女子(中学生B)、高校2年生男子2名(高校生A・B)の計4名の参加者を抽出した。4名の参加者を抽出した目的は、それぞれの学習者が異なる特徴を持っており、第1次分析で明らかになった全体的傾向を、さらに深く掘り下げるためであった。

2.2 手順

インタビュー実施前に、本研究の参加者とは異なる中学2年生1名および高校3年生1名を対象に、プレヒアリングを行い、インタビュー内容と方法を検討した。また、インタビューの対象者に対し、インタビューの内容について、前もって考えを深めてもらう目的で、事前アンケートを実施した。

インタビューは、2013年7～8月に実施され、実施時間は1人30～40分であった。インタビュアー1名とサブインタビュアー1名でインタビューに臨み、主としてインタビュアーがインタビューを実施した。インタビューは半構造化インタビューで、事前に大まかな質問事項は決めておき、インタビューを進めていく中で、適宜詳細な質問を行った。インタビュー実施者は、酒井、工藤、加藤、福本であった。インタビューは、参加者の許可を得て録音した。インタビュー実施後、録音を起こして文書化し、分析を行った。

2.3 分析方法

2.3.1. 質的分析方法としてのTAE

本インタビューを分析するにあたり、Thinking at the Edge (TAE)という手法を用いた。TAEは、アメリカの哲学者・心理学者であるジェンドリンらが開発した理論構築法で、「うまく言葉にはできないけれど重要だと感じられる身体感覚を、言語シンボルと相互作用させながら精緻化し、新しい意味と言語表現を生み出していく系統立った方法」(得丸, 2010, p. 5)である。得丸(2010)はTAEを質的研究法に応用し、心理学や日本語教育学の分野などで先行研究がある。TAEを用いた理由は、面接者と分析者を同一人物にすることで、インタビュー時の生徒の表情、声の抑揚、非言語から感じられた要素をフェルトセンスとして分析に取り組んでいくことができるためであった。

2.3.2. 分析手順

分析手順は、①フェルトセンスから語る(ステップ 1～5)、②実例からパターンを引き出す(ステップ 6～9)、③理論を構築する(ステップ 10～14)、の3つのパートに分かれている。パート1では、明確には言語化できないが自然と身体的に感じられる感覚(フェルトセンス)を言語化する。パート2では、多様な側面を選び出してパターンとして言い表すとともに、各パターンを相互に交差させ、データから新たに浮かび上がってくる知見を書きとめる。その後、パート3では、分析者が保持しているフェルトセンスによって用語を選出し概念を形成していく。本分析では、得丸(2010)作成のワークシートを用いて、14のステップのうちステップ12までの分析を行った(分析手順は表1を参照のこと)。

表1 TAE ステップ1～12 (得丸, 2010)

ステップ	内容
ステップ1:	フェルトセンスに形を得させる
ステップ2:	論理以上のものを見つける
ステップ3:	通常で定義で使っているのではないことに気づく
ステップ4:	キーワードに意味させたいことを書く
ステップ5:	キーワードに意味させたかったことを拡張する
ステップ6:	側面を集める
ステップ7:	側面の詳細な構造を見る
ステップ8:	側面を交差させる
ステップ9:	自由に書く
ステップ10:	タームを選択し相互に関連づける
ステップ11:	ターム間の本来的関係を探究する
ステップ12:	恒久的なタームを選び相互に組み込む

4つのインタビューは、それぞれ独立したデータとして扱い、各面接者兼分析者が上記に記した12のステップを踏んで分析を行った。分析にあたり、分析者はテープを起こしたスクリプトを何度も読み込み、データに関する「感じ」であるフェルトセンスを得た。その際、面接で得た「感じ」もフェルトセンスとして組み込んだ。

ステップ1～5では、フェルトセンスに注意を向け、データの中核を大まかに捉えた。

ステップ1… フェルトセンスを意識しながら、ぼつぼつと浮かんでくる語句を書きとめた。

例えば、中学生Aの場合、「選択している、自己決定している、多様な勉強方法を工夫している、聴いたり見たりしていい感じ、素直に受け止めている、ICTを利用して、インタビューのやりとりが気持ちがいい」などの語句が浮かんできた。

ステップ2… フェルトセンスを短い1つの文で表した。

ステップ3… ステップ2で作成した文において、最も大事な言葉を「キーワード」とした。

ステップ4… キーワードに意味させたいことを書いた。選んだキーワードの通常の意味を辞書で調べた後、通常の意味だけでは表せないフェルトセンス独自の意味を書きと

め、フェルトセンスの感覚をつかんだ。

ステップ5… キーワードで意味したかったことを拡張し、フェルトセンスを短い1つの文とした。

ステップ6～9では、データから多様な実例を選び出し、パターンとして言い表すとともに、各パターンを相互に交差させ、データから新たに浮かび上がってくる知見を書きとめた。

ステップ6… フェルトセンスに照らし合わせながら、インタビューの実例を選び出した。

ステップ7… ステップ6で選んだ実例からパターンを抽出し、例えば、中学生Aの場合、11のパターンが見出された。

ステップ8… ステップ7で得られたパターンの各側面を相互に交差し、フェルトセンスと応答させながら、新たに浮かんできた知見を書きとめた。この作業では、パターン1をパターン2に適用したものを1×2とし、1×3, 1×4と交差して、1×11まで行った。同様にすべてのパターンを交差した。例えば、中学生Aの場合、11×10で110個の組み合わせとなった。

ステップ9… これまでの作業で気づいたことや知見を書きとめた。

ステップ10からは理論を構築する。ここでいう理論とは、分析者がフェルトセンスを十分に感じながらデータから立ち上げた価値観構造または信念構造と言い換えることができる。この段階では、分析者はフェルトセンスを保持しながらも、用語間の関係性を見出し、論理形式を組み立てていく。

ステップ10… ステップ9までのすべての語句、句、パターンを眺め、重要だと感じられる語句をリストアップし、フェルトセンスに照らし合わせながら、最も重要だと感じられる3つの語句を選択した。次に、この3つの語句の関係性を明らかにするために、「A = B」、すなわち「AはBである」という文を作成し、フェルトセンスに合うように語句を補足して、6つの文を作成した。

ステップ11… ABCの語句の関係性をさらに深く考えるため、それぞれの語句を「～はもとも… (の性質)を持っている」の文にあてはめ、フェルトセンスで感じて気づいたこととともに出てきた新しい語句を書きとめた。

以上のステップにより、最終段階の概念形成を行う準備が整い、ステップ12へと進んだ。

ステップ12… これまでのステップを踏まえてフェルトセンスをあらためて感じ直し、新たな語句(概念)を選び、各概念を残りの諸概念を使って定義することで、諸概念を相互に組み込んでいった。それに基づき、理論の中核の文章とそれを表す図を作成した。

次項では、各参加者のデータから得られたパターンと理論の中核を中心に分析結果を示す。

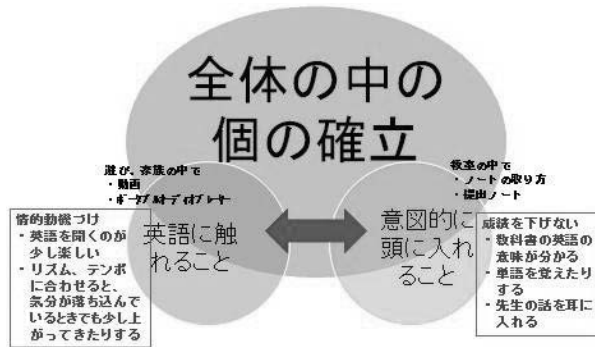
3. 分析結果と考察

3.1 中学生 A

この生徒は、いろいろなことを選択していると感じた。「自分で」という言葉が何回も出てくるように、自己決定している。動画で英語のアニメーションを聴くなど、「聴いたり見たりしていい感じ」で、多様な勉強方法を工夫して行っている。授業の様子を話す内容から、素直に受け止めているという印象を持った。ポータブルオーディオプレーヤーなどの ICT 機器を利用している。全体的には、インタビューのやりとりが気持ちよいと感じたが、少しもやもや感が残った。インタビューから読み取れる行動や意識、思考などのパターンを整理すると 11 項目となった。

- ① 教科書の英語の意味をわかりたいと思っている。
- ② 英語を頭に入れたいと思っている。
- ③ 英語の成績を下げないようにという意識を持って、勉強している。
- ④ 情意的な気持ちよさに、英語の学びの価値を見出している。
- ⑤ 将来の夢と英語の学習がリンクしていないが、今後のために英語を使っていきたいと思っている。
- ⑥ 英語学習がうまく行かなかった経験を自覚している。
- ⑦ 日常的に、無理のない範囲で行える、英語に関する活動を取り入れている。
- ⑧ 他人から言われずに、自分で勉強方法を決めている。
- ⑨ ICT 機器を使った英語に関する活動をしている。
- ⑩ 声に出しながら英語を学んでいる。
- ⑪ 教師の言うことも聞いている。(ある種の *introjected motivation* が見られる)

中学生 A は、授業、家庭、友達との遊びという他者が存在する「日常の生活」の中で、成績を下げないために教科書の英語の意味がわかることや、単語を覚えたりするといった「意図的に頭に入れること」や、ウォークマンで英語を聴いたり、インターネット上の動画を見たりするという「英語に触れること」を、他者を気にせず、自分で決めて行動に移しており、「全体の中の個の確立」があると考えられる。英語を「意図的に頭に入れること」や「英語に触れること」という学びは、他者との関わりの中で行うものではなく、個人内の認知活動である。家族、級友などが存在する環境において、英語の学びに関する決断を行うには、自分の考えをしっかりと持つという個の確立が必要となる。この生徒にとって、「英語に触れること」と「意図的に頭に入れること」は、その目的と方向性が異なる。前者は、楽しさや気持ちが高揚するという情緒的動機づけによる行為であり、後者は成績を下げないためといった目的と成績の向上という方向性を持つ認知活動であり、互いに一致しない。例えば、高校進学に向けた勉強態度について尋ねると、「英語だけ足手まといにならないようにしたい」と言うが、「これからのことを考えて、まあ使っていったりしたいと思う」とも答える。「英語に触れること」と、「意図的に頭に入れること」が相反し、本人の中では交わっていないのだろう。英語に触れるのは楽しいが、成績のために英語を勉強することに違和感を持っているのではないかと感じた。図1は、中学生 A についてまとめたものである。



「あーはい。そこで英語だけ足手まといっていうんですか。なんか、あんまり使わないからいりやうって思うんじゃないかって、これからのために考えてまあ、使っていったりしたいとまあ少し思うんで。」

図1 中学生 A の分析のまとめ

3.2 中学生 B

中学生 B は、先生のことが好きな従順な生徒で、問題を解くことが大切だと思っている。英語は人と比べて苦手だと思っており、自分の学習パターンや得意なことがわかっているのので、それに合った塾を選択するなど、自分のことをそこそこわかっている。自分の学習スタイルから抜け出すようなことはしない少し消極的な面もあり、勉強時間数を気にするところから、量を大切にしている学習者だと感じた。友だちを大切に思い、「友だちも頑張っているから私も勉強を頑張る」といった発言が見られた。家庭はそこそこ熱心で、家族にアドバイスを求めたり、協力してもらえらる状況にある。非常に頑張り屋で、部活も勉強も他の教科も一生懸命やっている。

読み取れるパターンとして、次の7項目が挙げられた。

- ① 英語の勉強の中心は問題を解くことである。
- ② 先生のやり方が好き。
- ③ 英語をたくさん勉強している。
- ④ まわりの人からいい影響を受けている。
- ⑤ 今の勉強方法を肯定的に捉えている。
- ⑥ 試験で点を取ることが英語の勉強の目標である。
- ⑦ 自分のスタイルを把握している。

「受けたい授業はどんな授業がいいの？」と聞くと、「今の授業でいいと思う」「問題を解く速さとかが身につくので、やっぱり入試のときに役立つかなと思う」と答えるなど、今の勉強を非常に肯定的に捉えている。先生のやり方を「よく役立つと思う」と答えているので、先生が提示する勉強法が好きな生徒だといえる。また、ラジオの基礎英語講座など、他の勉強方法も知っているが、聴こうとは思わない」と答えたり、授業中に試験と関係のない映画の話には手を挙げて答えることはないことから、試験で点を取ることが英語の勉強の目標だ

と思っている。暗唱や暗写をすることも彼女の発言から出たが、「期末テストに教科書の本文が丸々出て、それについて抜けている単語を書いたりするので、暗唱しているとそれを思い出して書いたりできる」と答えている。図2は、中学生 B についてまとめたものである。

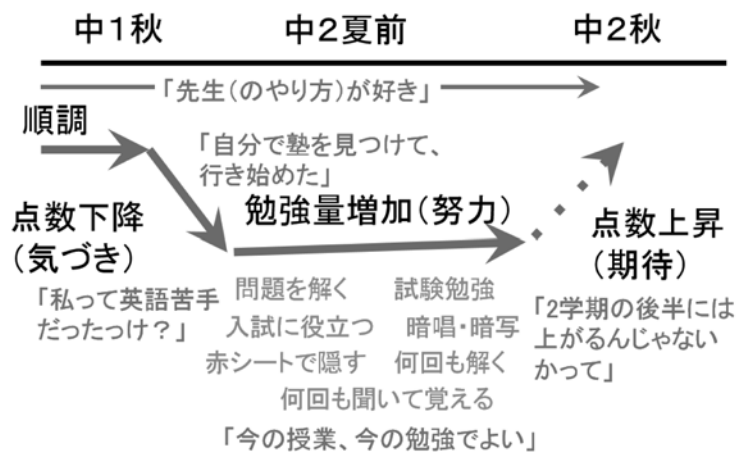


図2 中学生 B の分析のまとめ

3.3 高校生 A

高校生 A は、好きなものを話すときの様子と嫌なことを話しているときの雰囲気と全く違っていることから、好き嫌いがはっきりしていると感じた。「カッコいい」という言葉を連発したりするなど、カッコよさを意識している。幼稚園の先生から塾の先生まで、いろいろな先生のエピソードが多く出てきた。しかし、インタビューの最後に、彼は苦しんでいると感じた。いろいろ批判的な部分がある裏には、自分自身に対して苦しんでいるのではないかと感じ、もやもやを残してインタビューが終わった。パターンとして表れてきたのは7点になる。

- ① 学習以外のものの誘惑に負けてしまう。
- ② 感受性が豊かである。
- ③ 先生の影響が大きい。
- ④ 中学の英語学習では自信があった。
- ⑤ 高校の英語学習の細かさや量に負担を感じている。
- ⑥ 高校に入って自信を失いつつある。
- ⑦ 高校の英語学習に納得していない。

この高校生は、中学時代に教科書以外にもいろいろな本(『アラジンと魔法のランプ』や『トム・ソーヤーの冒険』など一般的に知られている物語)を英語で読むことができたことに感動し、英語に自信があった。次のように述べている。

「いやあの中3のときに、塾行ってたんですけど、すごくなんかいい先生がいて、そ

の先生がこういう本貸してくれたんですけど、でそれが、その本はアラジンとか、なんかトム・ソーヤーの冒険とかけっこう一般的に知られてるやつ、であって、でそれ初めて読んだときに、こうなんか英語で本読めることにすごいなんか感動して、でそこからずっとなんか英語読むの楽しいなって思ってたし、あぁ多分家にこういうめっちゃが一つあったら、なんかかけえなっていうのがちょっとあって、で集めようかなっていうのが、思ってたっていうのがあります」

また、英文の大意を把握する方法を塾の先生に教えてもらったり、先生が手作りの単語リストを作ってくれ、そのことに感動したりと、好きな先生からの良い影響で英語学習に積極的に取り組んでいた。しかし、高校に入って、「no more than」と「no less than」の違いなど、細かなニュアンスの違いや理解を難しく感じ、英語学習の大変さにつづいて自信を失った。また、大量の問題集に取り組むことを求めるやり方に納得できず、また英語を読む感動を味わえなくなっている。例えば、サイドリーダーが定期テストの題材として使われ、詳細理解のみを求められており、楽しくないという発言をしている。英語学習に立ち向かう意欲を失って、結果的に成績も芳しくなくなってきた。一方で、テレビの旅番組を見て興味を持ち、オーストラリアやヨーロッパにいつかは行ってみたいと願っており、現地の人と普通の会話ができるくらいの力が欲しいと考えている。英語が必要であるという認識と、高校の英語学習にうまく対応できない自分自身の両方に苛立ちながら葛藤している様子も見られた(図3参照)。



図3 高校生 A の分析のまとめ

3.4 高校生 B

高校生 B に関するフェルトセンスは、「行動に理由がある、安定している、学習に押されていない、気持ちがり乗り越えている、不安を持っていない、なぜか違和感」であった。全体的に好印象を持ち、とても自信に満ちあふれていて、キラキラしていたが、インタビュアーは違和感を持った。抽出されたパターンは、次の8項目である。

- ① 学校の授業を受け入れている。
- ② 英語をリアルに感じた楽しい体験がある。
- ③ 分析や構造化が好きである。
- ④ 文法をコミュニケーションに活かせると思っている。
- ⑤ 興味を持ったことに自分で行動を起こす。
- ⑥ コミュニケーションのおもしろみを理解している。
- ⑦ 先生を肯定的に受け入れている。
- ⑧ 課題を無理なくこなしている。

彼は、高校に入る前にいろいろと英語に触れたことが、英語に積極的になる原体験となっている。小中時代にも多くのインパクトのある楽しい英語体験をしている。中学2年生のときにオーストラリアで10日間ホームステイをし、英語だけを話す環境に置かれ、言葉に興味を持つようになったと、とても生き生きと語ってくれた。高校では教科書本文を2時間かけて写す予習があるが、そういうことも含めて高校の英語学習を受け入れて無理なくこなしている。小学生のときには、英会話教室に自ら希望して通うなど、興味を持ったことを実現させるために自分から行動を起こしている。「ALTの先生がすごく優しくて」とか、「ちゃんと聞いてくださって」と話すように、先生を肯定的に受け入れている。また、日常的に学んだ文法や語彙を活用できている。彼の将来の夢は、言語学の研究者で、学会で自分の意見を英語で言えるようになりたいと、はっきりとしたイメージを既に持っている。この生徒は、子どもの頃の体験が学習を促進し、高校の英語学習にも疑問を持たず、今のところ適応している。テストを含めた学校の学習がうまく進んでいるようだった。また、授業でディスカッションをしたり、ALTと話したり、ライトノベルを読んだり、英語のプレゼンテーション番組を見るなど、学んだ文法や語彙を活用できることによって学習意欲をさらに高めていて、有能感とゆるぎない自信を感じている。図4は、高校生Bの分析のまとめを示したものである。

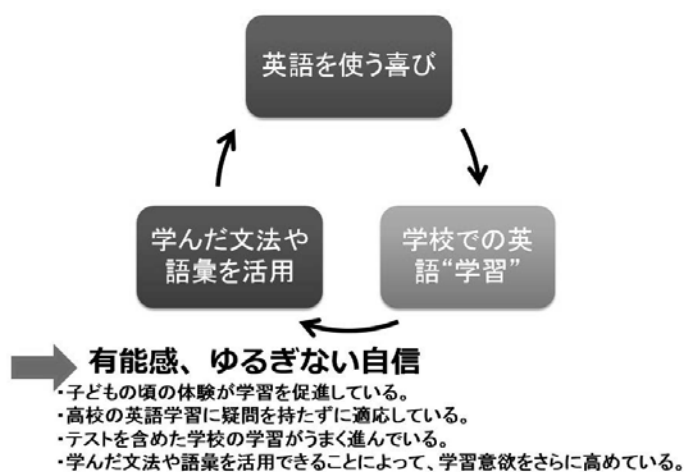


図4 高校生Bの分析のまとめ

4. おわりに

第一に中学生について述べる。中学生 A も 中学生 B も様々なレベルで自己決定していることがわかった。どのように学ぶことがどのような効果があるのか、という情報が与えられれば、より適切に自己決定を行えるのではないかと考える。一方で、英語を使ったコミュニケーション経験と英語学習が分離しているが共存している生徒(中学生 A)と、片方のみに価値を置いている生徒(中学生 B)がいることが判明した。

第二に高校生について述べる。本調査の分析結果から、生徒の学習に、先生が良い影響も悪い影響も与えていることがわかった。また、生徒の学習に、様々な英語経験が影響を及ぼしていることが示された。「中高の授業のギャップ」や「未来の目標と現在の学習との不一致」なども観察された。

量的調査とは異なり、質的研究は対象人数が限られるため、出てきた結果は個別事例であり、一般化できるものではないが、転用可能なものである。大人数の調査では、全体的な傾向はわかるものの、個々の学習者の具体的な学び方などは見えてこない。今回一人ひとりから得られた個別の文脈に即した情報は、日々の指導に豊かな示唆を与えるものである。これらの示唆に基づき、教師は、生徒に何を期待し、何をしていくべきか具体的に考えるべきであろう。

参考文献

得丸さと子 2010. 『ステップ式質的研究法——TAE の理論と応用』海鳴社.